

授業研究

オリゼミにおける「one minute video 制作実習」の成果と課題

間島 貞幸

[要旨] 大学における映像制作がもたらす能力開発の実践事例は少なく、制作導入の方法論、理論的検討は十分とは言えない。今後、関係者による情報交換を積極的に行い、その教育的価値について理論化することが重要であり、そのために事例のさらなる蓄積が必要となる。

今回、日本ユニセフ協会主催の映像コンテスト「第2回 one minute video コンテスト」に作品をエントリーすることを前提に、メディア情報学部の1年生全165人を対象とした、映像制作の実習を行うことになった。ほとんどの学生にとって初めての映像制作で、制作期間は90分授業3週分、映像制作系のゼミの学生が、ティーチングアシスタント(TA)として指導することになった。初めての試みで、しかも制作条件的に厳しい中で、期限内に30作品が完成した。作品を完成させるプロセスを通して、チームワーク、主体性、相手の立場になって考える思考力、責任感ほか様々な能力の向上が見られた。さらに課題も明らかになった。

今回の実践内容を報告し、今後の映像制作の実習授業の設計について考察と提案を行う。

[キーワード] 映像制作、メディア・リテラシー、大学教育、デジタル映像、メディア表現、情報発信、実践教育、one minute video

1. はじめに

筆者は5年前より映像制作がもたらす能力開発について実践研究を行っている。

映像制作活動はこれまでメディアリテラシーとの関係で論じられることが多かったが、映像制作による能力開発と教育的効果についてその有用性が指摘され、各大学でも以下のような報告がある。例えば、松野 [1] は「コミュニケーション能力」「協調性」「責任感や社会性」「構成能力」「広報宣伝能力」「取材能力」「マネジメント能力」「絶対に崩れない自信」をあげている。塚本 [1] は「異なった視点から物事を捉える能力」「映像、音、文字を使った効果的なコミュニケーション能力」「地域の文化理解」「デジタル編集技術」をあげている。五嶋 [1] は、「ゼロからの発想力」「コミュニケーション力」「協調力」をあげている。間島 [1] は、「他者とのコラボレーション能力」「リサーチ

力」「前に出る積極性」「チームワーク」「自己犠牲的な発想力」「プレゼン力」「文章作成能力」「文章構成能力」「視野が広がる」「プロデュース能力」をあげている。

しかし、残念ながら映像制作教育は、場所も種類もレベルも様々で、モデル化されたものは未だに見あたらない。

2013年6月、日本ユニセフ協会主催の映像コンテスト「第2回 one minute video コンテスト」¹⁾に作品をエントリーすることを前提に、メディア情報学部の1年生165人全員を対象とした映像制作の実習を行うことになった。「映像制作実習」など、現在、2年生以上を対象に多くの映像制作関連の実習授業はあるが、今回の取り組みは初めてとなる。

今回の取り組みにおいては、メディア情報学部の学生として、『映像作品を通してメッセージを

伝えること』、そして『チームで協力して作品を完成させること』、を目標とした。

制作のプロセスを通じて学生たちにとってどのような成果があったのか、さらにどのような課題が明らかになったのか、この取り組みを来年度以降も継続して行うために検証する。

2. 「one minute video」制作実習の概要

2.1 「one minute video」とは

「one minute video」は、1分間の映像を通して、メッセージを世界に向けて伝える活動である。自己表現力を養い、国境を越えて興味や意見、夢や希望を分かち合うことを目的として、2010年より(公財)日本ユニセフ協会が、one minute video事業の取り組みを始めた。

2013年8月3日に「第2回日本ユニセフ協会 one minute video コンテスト」が開催された。作品のテーマは『地球市民になろう～見つめよう、自分のこと、地球のこと～』である。なお、このイベントは、ユニセフの職員と東海大学、文教大学そして駿河台大学の有志の学生による「ユニセフ one minute video コンテスト学生事務局」が、運営に当たっている。

2.2 制作体制、機材について

メディア情報学部の1年生は、大学での勉強を支える基礎的な知識と技術を身につけ、基礎学力を伸ばすために全員、オリエンテーションゼミナール(以下オリゼミ)に所属している。2013年度の1年生は165人で、10クラスに分かれており(1クラス16人～17人)、毎週木曜日の1限と2限に5クラスずつ、授業を行っている。今回の取り組みのために、事前に各クラス担任の先生にお願いして、1チーム5～6人ずつ、3チーム作ってもらった。チーム編成については、各先生にお任せした。こうして全体で30の制作チームが出来上がった。

今回は、先生ではなく、映像制作系ゼミに所属

する3、4年生の有志22人にティーチングアシスタント(TA)として、指導に当たってもらうことにした。その理由として、対象学生が165人と通常の映像制作の実習としては大規模であること、ほとんどの学生にとって初めての映像制作であること、さらに3回の授業時間内で作品の企画から完成まで行わなければならないことからより細やかな指導が必要であること、さらに教わる側から教える側にまわることで、TAにとっても多くの学びがあると判断したためである。各クラス担当として2人のTAをつけて、指導に当たってもらうことにした。

機材は、ほかの実習授業の関係でビデオカメラを使用することが不可能であったため、時間外でも撮影や編集が出来るように学生が持っているスマートフォンを使用することを考えていた。しかし、事前に学生が編集アプリをダウンロードする必要があること、また機種によって編集ソフトがバラバラなため、限られた時間の中でTAが、臨機応変に指導することが困難であると判断し、結果として、各チームにipadを1台ずつ渡して、撮影と編集を行わせた。編集ソフトは、ipad専用の編集アプリiMovieを使用することにした。ただし、これまで、ipadを使用して撮影、編集する実習授業は行われてはいなかった。

2.3 活動スケジュール

「第2回 one minute video コンテスト」作品募集の締め切りが、2013年7月1日で、それに間に合わせるためには、3回の授業で作品の作り方を教えて、作品を企画し、撮影、完成させなければならなかった。また、今まで one minute video を作ったことがないTAもいたため、TA研修会を4回実施した。活動スケジュールは表1の通りである。

表1 活動スケジュール (2013年)

6月5日	TA研修会①
6月12日	TA研修会②
6月13日 (制作1週目)	講習会 one minute video の作り方を指導 作品企画 メッセージを考える メッセージを一つに絞る 画コンテの作成
6月19日	TA研修会③ ipadによる撮影方法の確認
6月20日 (制作2週目)	各クラス内で企画のプレゼン 撮影
6月26日	TA研修会④ ipadによる編集方法の確認
6月27日 (制作3週目)	編集～作品完成
7月25日	作品上映会

2.4 活動の具体的な内容

2.4.1 TA研修会

「ユニセフ one minute video コンテスト学生事務局」副事務局長の村上雅彦さん（駿河台大学メディア情報学部4年）が中心となり、TA研修会を4回（事前に2回と撮影、編集の前日に2回）実施した。事前の2回の研修会では、one minute video の作り方の確認、3回の実習内容の詳細について、見本として上映する過去作品の選定、1年生に配布する資料の作成などを行った。最も時間をかけて話し合ったことは、「どうしたら自分が発信したいメッセージを見つけられるか」についてである。映像作品を作る上で最も重要なのが、「企画」である。しかし、その「企画」を考えることはかなり難しい。伝えたいメッセージを考えるためには、日頃、世の中や自分の周囲の環境に対して問題意識を持っていなければならない。筆者のほかの実習授業では、映像作品の作り方を伝えたあとに、学生が企画を考えようとするのに、あまりに世の中に対して無関心であるため、企画が考えられないことを痛感させられることが多い。そして、あらためて世の中に目を向け、問

題意識をもつことの大切さに気づいてもらうのだ。今回、メッセージが見つけれなかったチームに対して、TAがうまく導けるように事前にいくつか「伝えたいメッセージ」を考えて用意しておくことにした。



写真1 TA研修会の様子

2.4.2 講習会・作品企画・画コンテ作成

第1週目は1限と2限にそれぞれ5クラス15チームが大教室に集合し、TAが、これから作品を制作して、「第2回 one minute video コンテスト」にエントリーすることを伝えた。そしてモニターに文字や映像を映して、one minute video の作り方を説明した。いくつか過去に制作された作品を見せてイメージをつかんでもらった。具体的には①伝えたいメッセージを決めよう～自分が今気になっていること、伝えたいことを考えてみる②ストーリーを考えよう～メッセージをどのようにして伝えるか、起承転結を考えてみる③ストーリーを4コマの画に描いてみよう～画を描くことで、どんな風に撮るのかイメージを画にしてみる、また音楽を使用する場合は、どんな音楽をどのシーンに使用するのか考えてみるよう説明した。決して人任せにするのではなく、自分のこととしてみんなをよく話し合い、納得できる作品を作る努力を最後まで行うことを強調して伝えた。全体説明のあとは、各クラス担当の2人のTAが、クラスの皆と合流し、それぞれ自己紹介し、チームのリーダーを決めて、時間外でも連絡が取れるように連絡先を教え合い、個別で指導に当

たった。チームの中で積極的な学生だけで、作業が進行しないよう、TAがチームの一人一人に声がけをし、活発な意見交換がなされるよう努めた。当初、「伝えたいメッセージがなかなか思い浮かばないのではないか」と懸念されたが、実際に話し合いを始めて見ると、時間内で30チームのほとんどすべてが、メッセージを一つに絞り、ストーリーを考え、画コンテを作成するところまで進めることが出来た。授業の最後に、次回は、各ゼミ教室に集合し、企画のプレゼンテーションを行うこと、その後、ipadで撮影を始めること、それまでに撮影スケジュールを立てておくことを伝えた。中には、メッセージがなかなか浮かばないチームがあったが、その場合はTAがリーダーと連絡を取り合い、時間外にTAとチームが集まって作業を進めた。

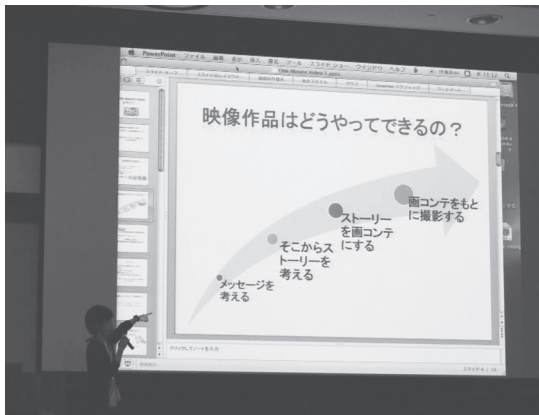


写真2 TAによる全体説明の様子



写真3 one minute video の作り方を説明する
右：村上雅彦さん、左：駒場菜さん



写真4 TAがチームの中に入って伝えたいメッセージを決める



写真5 伝えたいメッセージについて意見を出し合う学生たち



写真6 メッセージが決まったらストーリーを考え画コンテを描く

2.4.3 企画のプレゼン・撮影

第2週目は、クラスごとにゼミ教室に集合し、チームで作品企画のプレゼンテーションを行った。プレゼンのポイントとして、伝えたいメッセージが明確であるか、ストーリーがわかりやすく、面白いが、撮影スケジュールがきちんと立て

られているか指導した。映像作品はただ作れば良い、とは考えてはいない。そのプロセスの中で自分たちが考えていることをほかの人たちにわかりやすく伝えることが、とても大切だと考えている。伝えることで、自分たちが考えていることがより明確になる、他人の話聞くことで、自分たちが作ろうとしているものに対し、いろいろなアイデアが浮かぶ、ほかのチームを意識することで対抗意識が湧き、作品制作に対するモチベーションが上がるなどが期待できるからである。企画のプレゼン後は、チームに一台ずつ、ipad を渡し、TA が ipad で撮影する方法や撮影上のポイントを教えた。特に撮影の注意事項として① ipad はみんなのものなので大切に扱うこと②手ぶれに十分に注意すること③編集しやすいようにのりしろとして前後5秒間づつ、必ず余計に撮影しておくこと④タイトルベース用に黒味を撮っておくこと⑤手で ipad のマイクをふさがないように注意すること⑥追加撮影する際に登場人物の服装が変わらないよう注意することなどを教えた。

時間内で撮影を全て終えたチームもあったが、来週の編集の時間までに必要なシーンを全て撮り終えておくよう、時間外の ipad の貸し出しを2週目の授業の午後も含めて4日間行った。きちんと計画を立てて撮影する方法を学んで欲しかったので、事前にチームのリーダーが、各クラスの担当 TA に ipad の時間外貸し出しの申し込みをするよう指導した。



写真7 ゼミ教室で TA が企画のプレゼン方法について指導する



写真8 ipad で撮影する学生たち。撮影中いろいろなアイデアが出て盛り上がる

2.4.4 編集

第3週目は、TA 同士でいろいろ情報交換できることと、チームごとの進行情況が一目で見渡せるようにと、第1週目と同じ大教室に集合して、ipad による編集作業を行った。まず TA が、ipad による編集の方法を教えてから、チームごとに編集を行った。事前に考えた画コンテを参考にして画をつなぎ、テロップや音楽を入れていった。編集は、今まで頭の中で考えたことが、次第にカタチになっていき、企画や撮影などで苦労したことが報われる楽しい作業である。作品が完成したら、自分たちの作品をあらためて客観的に見て、伝えたいメッセージがきちんと伝わっているのか、考えてもらった。ずっと自分たちの作品のことを考え、制作していると、自分たちの作品を客観的に見られなくなることが多い。大切なことは、制作者の狙いがきちんと他人に伝わることである。より作品がわかりやすく、面白くなるようギリギリまで粘って努力を怠らないよう指導した。そしてどのチームも途中で脱落することなく30の作品が完成した。



写真9 iPadで編集する学生たち。作品が次第にカタチになり熱が入る



写真10 iPadの編集画面

2.4.5 上映会、「第2回 one minute video コンテスト」に作品をエントリー

春学期最後のオリゼミの時間にAVホールにて作品上映会を行った。時間の関係もあって1限と2限でそれぞれ制作した15作品を上映した。作品を完成させるだけでなく、大きなスクリーンで自分たちのチームが作った作品やほかのチームの作品を見比べて、あれこれ思考を廻らしたり、意見交換することも重要だと考えている。自分たちのチームで作った作品も完成からおよそ1ヶ月が経過しているので、より客観的に、冷静に見ることができる。時々、笑いも起きたが、全体的には皆、真剣に作品を見ていた。

完成した30の作品は、「第2回 one minute video コンテスト」にエントリーした。コンテストには全国から323作品の応募があった。その中で近藤沙伎さん、新井里沙さん、押木翼さん、粕谷勇太郎さん、瀧澤結梨果さんが制作したコマ撮り作品「with the war for whom?」が入賞した。



写真11 「第2回 one minute video コンテスト」で入賞した作品「with the war for whom?」



写真12 入賞した新井里沙さん、瀧澤結梨果さん、近藤沙伎さん、粕谷勇太郎さん、押木翼さん (2013年8月2日 日本ユニセフ協会橋本正ホールにて)

3. 結果 (学生、TAを担当した学生の変化)

3.1 学生の感想

作品上映会后、今回の取り組みに関するアンケートを実施した。1年生165人中144人から解答があった。アンケート結果は表2の通りである。辛かった、大変だったと答えた学生も作品を完成させて、達成感を感じていることがわかつ

た。

表2 アンケート結果

今回の映像制作の取り組みの感想 (有効解答 144 名)
楽しかった 114 名
辛かった 12 名
楽しかったし、辛かった 2 名
大変だった 6 名
何も感じなかった 10 名

今回の取り組みを経験して、学生から様々な気づきがあった。以下、アンケートからの抜粋である。

- ・主体性を持たなければいけないと強く思った
- ・作品制作を通じて意見をたくさん出し合って、グループのメンバーと仲良くなれた
- ・仲間と協力する力がついた
- ・仲間とコミュニケーションをとることに苦労したが、積極的に意見するよう努めた
- ・協力し合うことの大切さ知り、自分から積極的になろうと考えるようになった
- ・チームで協力することは楽しいことだ、ということがわかった
- ・自分たちが作った作品なら何が言いたいのかわかるけど、他人が作った作品は何が言いたいのかわからないものが多いことがわかった
- ・作品を作るには、協調性が必要だと感じた
- ・作品を作る大変さとゼロから考えて作る楽しさを知った
- ・もっと良い作品を作りたいという意欲が湧いてきた
- ・作り手の視点でテレビを見るようになった
- ・仲間との絆を感じた
- ・相手にどう伝わるか考えるようになった
- ・作品を完成させたあとでも、「もっとこうすれば良くなる」といった向上心が持てるようになった
- ・考える力がついた

- ・人の意見を聞くことの大切さを知った
- ・いろいろなことに対してやる気が出て来た
- ・自分に自信がついた
- ・すべてにおいて一生懸命になろうと決めた

3.2 TA を担当した学生の感想

教える側になったことで TA の学生にも様々な気づきがあった。

- ・時間外の活動が多く、担当学生と状況確認のためにメールしても返信がなく、作品が完成するの不安に感じた。あらためて報告・連絡・相談の重要性を知った
- ・事前に撮影で使用する教室や機材の手配など、活動前における事前準備がしっかりできるようになった
- ・1年生の突発的な質問に対して適切な返答が出来るように、常に現場の状況や問題点を把握するようになった
- ・教える側に立つことで、教えるための準備の大事さを知った。また、何をどんな順番で話すとわかりやすいかなど、いろいろと考えさせられた。
- ・人前で落ち着いて話すことの難しさと、大切さがあった
- ・相手に何かを伝える時は、より親切に、軽やかに物事を伝えることを意識するようになった
- ・教える立場になったことで、適当な発言ができなくなり責任感が出てきた
- ・質問をされたときに答えられないことがあると1年生との信頼関係に関わるので、自分からももっと学ぼうという気持ちになった
- ・映像制作経験の無い1年生に教えることで、企画のアイデアを出したり、撮影の進め方を考えたりするときに、わかりやすく噛み砕いて相手に伝えることを常に意識するようになった
- ・相手の立場になってどうやったらわかりやすいかを一番に考えられるようになった
- ・年下の人とのコミュニケーションの取り方がイ

マイチわからなかったが、やはり目線を同じにするということの大切さを学んだ

- ・ただ聞いているだけ。ただ言われたことをやっていたらいいだけ。この事がどれだけ楽で、甘えていたかを痛感した。もっと自分たちが発信して行動していかなければ、何も生まれず、なにも成長できないと思った
- ・正解のない「映像」について教えることは並大抵なことではないとあらためて感じた。TAとして各グループのリーダーをまとめる、ひとつ上のリーダーというイメージで、俯瞰で見ようとしていた結果、全体の視野を広げて教えられるようになった
- ・チームの中にやる気のある人やない人などいろいろな人がいるが、人をまとめることの難しさやもどかしさを学んだ。人に厳しい態度を取ることが苦手であるが、上に立つ者として言わなければならないことをビシッと言うことの重要性を知った
- ・今までも人に教える経験はしてきたが、人に何かを教えて、その喜びを共有できることは、良いことだとあらためて思った

3.3 考察と今後の課題

1) 事後アンケート結果のまとめ

ほとんどの学生にとっては映像制作が初めてで、しかもわずか90分授業3回で作品を企画し、完成させることはとても困難なことに思えた。しかし、TAによる熱心な指導が功を奏したのか、全30チームが作品を期限内に完成させることが出来た。今回の取り組みで目標に挙げた、映像を通してメッセージを伝えること、チームで協力して作品を仕上げることは達成できたと言える。およそ8割の学生が今回の取り組みを「楽しかった。またぜひやりたい。またはやってもよい」と感じていたことがわかった。有志で参加したTAも全員が、そのプロセスで個々にもどかしさを感じながらも結果として「参加して良かった」と答えている。今回参加した1年生やTAの事後ア

ンケートから以下のことが見えてきた。

①映像制作の魅力を知り、さらに深く学びたいという意欲の向上

ゼロから作品を作ることの難しさを感じながらも、完成させた時の達成感を味わい、もっとわかりやすく伝えるための考え方や撮影、編集について学びたいと考える学生が多かった。映像作品は、正解がない。そのことを理解し、今後、作り手の立場になって、いろいろな作品を見て研究して、魅力的な作品を作ってくれることを期待している。

②チームで協力して作り上げることの面白さを知る

チームのみんなで協力しあって何か行うことを苦手と感じる若者は少ない。しかし今回の取り組みを通じて、1つの目標に向かってみんなで意見を交わすことでお互いを理解し、結果として仲良くなることを学んだ。またひとりではなく、みんなで協力することでより良いものが出来ること、その結果として、強い達成感を感じることを、学んだ学生が多かった。

③主体性の向上

主体的に行動することが苦手と感じる若者が多い。しかし、映像作品は、積極的に意見を言ったり、相手の意見に耳を傾けるなど自分から意識的に行動を起こさないと完成までこぎ着けることができないことを学び、多くの学生が、主体性を持って作品作りに臨んだと言える。これをきっかけに、映像制作に限らず、今後「何事も一生懸命やる」と覚悟を決めた学生が見受けられたことはとても良いことだと考える。

④TAのコミュニケーション能力の向上

映像制作に興味がある人、ない人が混在する中で、TAは「何をどんな順番で話す」とわかり

やすいか」考え、落ち着いて話すことの難しさ
と大切さを理解し、伝える時は、「より親切に、
軽やかに物事を伝える」ことを意識することで
コミュニケーション能力が向上したと言える。

⑤TAの相手の立場に立って考える能力の向上

映像制作が初めての学生は、経験者にとって
当たり前と思うような素朴な質問を連発する。
TAはいつでも対応できるよう現場の状況を常
に冷静に判断し、いろいろな質問に答える準備
を怠らないようになった。そのために以前より
も自分からもっと学んでいこうという姿勢が強
くなった。

⑥TAの責任感の向上

映像制作が初めての学生に90分の授業3回
という限られた時間内に作品を完成させるため
に、TAは時間外でも、チームのリーダーと連
絡を取り、何か問題がないか、常に進行情況を
把握し、教室の手配など突発的に起こったトラ
ブルにも迅速に対応するなどの経験を通して責
任感が向上した。そして自分の映像制作の時
は、より事前準備を緻密に行うようになった。

2) 今後の課題

今回の実習授業を通して以下の課題が浮きぼり
になった。

①実施方法の再検討

今回の取り組みは、イレギュラー的に実施し
たため、オリゼミのプログラムを途中で変更
し、90分の授業3回で作品を完成させること
にした。初めての試みということもあり、限ら
れた時間の中で最後まで緊張感を保ちながら、
進めることができたので30作品全てが期限内
に完成したとも言える。しかし、途中で強引に
作業を進めさせた部分も否めない。一度に100
人を超える人数では、現在の実習教室で授業
を行うことは不可能なので、今後もipadによる制

作が基本になると考えている。来年度以降もこ
の取り組みを実施するならば、ipadの操作方法
(撮影や編集)について90分かけて学ぶ必要が
あると考えている。

②機材の貸し出しシステムの構築

撮影や編集などipadを授業時間外に貸し出
すが必要になってくる。今回は、メディア
工房スタッフの高田昌裕氏にipadの貸し出し
を手伝っていただいた。ただし、高田氏もipad
の保管場所に常駐するわけにはいかない。その
ため、TA学生で分担して貸し出し業務を行う
など今後、機材の貸し出しやメンテナンスにつ
いてのシステムを構築する必要があると考
える。

③映像制作系以外のゼミからもTAを募集す る

筆者は、今回のようなTAの機会がもっと多
くあれば学生にとって実に有益であると思
っている。今回は、映像制作系のゼミ生に限定
してTAを募ったが、彼らにとっては、映像制
作のことに関わらず、実に多くの学びがあ
ったと言える。前もってTA研修会を行い、本
人の意欲さえあれば後は、映像制作系ゼミに
限らず、いろいろなゼミに声をかけてTAを
募るべきだと考えている。

④映像コンテンツによる指導

映像制作は正解がないので、学生が作品を
制作する過程で直接指導者が、意見を言っ
たり、話し合いを通して作品のクオリティを
上げていくべきものだと筆者は、考えてい
る。しかし、今回のように、「どのようにして
one minute videoを制作するのか」「作品
を企画する際のポイント」「ipadで撮影す
る際のポイント」「ipadで編集する際のポ
イント」など映像制作における基本的な知
識は、映像コンテンツを制作し、学生があ
らかじめ予習すれば、後の作業もス

ムーズなのではと思われる。

参考文献

注

- 1) 文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の一環として One minute Video が制作された。

- [1] 松野良一、塚本美恵子、間島貞幸、五嶋正治、村田雅之『映像制作で人間力を育てる—メディアリテラシーをこえて—』田研出版、2013 p.183

Achievements and Challenges of One Minute Video Production Practical Training in Orientation Seminar

by MAJIMA Sadayuki

[Abstract] There is currently a lack of sufficient theoretical studies and practical examples in the area of developing an effective methodology for teaching video-making in university classes. Given this situation, instructors should collaborate in sharing information concerning their own teaching practices and results, and work towards the creation of a unified teaching model that can be used by any instructor. In order to achieve this goal, case studies of actual teaching practices need to be analyzed.

As a first step, the Faculty of Media and Information Resources had all of its 165 first-year students participate in a video-making contest. This was UNICEF's "The Second One-minute Video Contest". All first-year students participated in this project, and, for most of them, this was their first attempt at creating a short video. Students were taught how to make a video during three 90-minute classes, and had three weeks to complete their group's video. There were 30 groups with five to six students in each. Instead of the regular instructors, teaching assistants (TA's) were chosen among the seminars with an emphasis on video-making. Although this was the first time the Faculty of Media and Information Resources has undertaken such a project, and the students were allowed only a very short period of time, all 30 teams were successful in completing their videos.

Through the process of working with others to plan, film and edit their video, students received many benefits, such as increasing their sense of responsibility, improving their teamwork skills, becoming more assertive, and gaining an ability to understand others and accept their ideas. Although the students gained much, this does not mean that the process of teaching video-making was without faults. This report describes the educational practices that were followed and their results, highlighting challenges and areas that could be improved with the aim of providing insights for teaching classes on video-making.

[Key Words] Video production, Media Literacy, University education, Digital video, Media representation, Transmission of information, Learn-by-doing teaching, one minute video